

「西安交通大学サマースクール参加報告書」

京都大学経済学部1年 中尾梨奈

今回のプログラムに参加するにあたって、私は3つの成果を期待していた。一つ目は語学能力の向上、二つ目は中国文化の学習、三つ目は交友関係の発展である。それぞれについて、どのような成果が得られたか振り返ってみたい。

一つ目の語学能力の向上について。正直なところを述べるとあまり向上したとは言えなかった。というのも話しかけることはできるが、返事の内容を聞き取ることができず会話を続けることができなかったのである。文章を見て学習していたため文字で意味をつかんでいることが多く、中国語を音で覚えようとしていなかったことを痛感させられた。今後の学習ではリスニングも重視していきたい。最終日のテストで行っていたように、中国語で簡単な質問を投げかけられるのは有効な練習方法だと思った。音を聞き取り、意味を理解し、自分の文法力に見合った返答を構成し、音で返すことができるからである。また、今後もこのプログラムを実施するのであれば、日本人の方が人数が多いとどうしても日本語で話してしまいがちになるので交通大学側の学生の参加人数を増やせるとよいと思う。

二つ目の中国文化の学習について。これについては期待していた以上の成果が得られた。西安といえばかつて歴代中国の首都長安であり、兵馬俑や華清池なども有する中国史における有名な舞台であったという程度の知識しかなかった。今回の研修で、明清時代に流行った秦腔、色鮮やかな農民画、繊細かつ華やかな剪紙などの民俗芸能について学ぶことができた。今まで宮廷文化にしか目を向けていなかったため、これらのものは新鮮だった。関中民俗博物館では明朝時代の官吏や富豪の邸宅を巡り、春秋戦国時代から中華民国時代までの文物を鑑賞し、庭園や吉祥模様の装飾を眺め、古代中国の空気に浸ることができてたいへん興奮した。唐代舞踊の長恨歌にも非常に心動かされた。唐代舞踊といつつ大がかりな舞台装置を駆使し、踊りもバレエやアラビア風のダンスを取り入れ現代風にアレンジしてあったが、そのさまは新興国と呼ぶにふさわしい迫力を持ち、中国の発展に感慨すら抱かされた。長恨歌には全句暗唱したこともあるという思い入れもあり、華麗かつ壮大な舞台に一瞬たりとも目が離せなかった。ほかにも食文化、太極拳、広場舞、日本とのゆかりある地についてなど多くの文化・風俗について学んだ。

三つ目の交友関係の発展について。今回のプログラムで出会う交通大学の学生方、共に西安へ学びに行く12名、皆かけがえのない友人になるだろうと思っていたがその通りであった。西安と日本は決して近くはないし、参加した日本人学生の学年・学部もバラバラで再び一堂に会するのは難しいだろうが私は悲観していない。私は中国流の友達の考え方が好きである。曰く、次いつ会えるのか分からなくても、仮に今後まったく会えなかったとしても、ずっと友達なのだ。現代では心だけでなく、インターネットを通じていつでも連絡をとることができる。インターネット時代に生きる私たちの責任はこのようなつながりを生かし、さらに活発な交流を図ることだと思う。

最後に進路に関しての影響も述べたい。留学は以前から視野に入れていたが、今回のプログラムに参加することによって本格的に検討するようになった。普段関わることのない院生や4回、5回先輩にお話を伺うことで、留学するならどのタイミングがいいのか、就活あるいは公務員試験、会計士試験などとの兼ね合いはどうするのか、今後3年半の人生設計を具体的に考えることができるようになったためである。また、以前から新興国、とりわけ中国・ベトナムをはじめとする東南アジア圏の経済に興味があったが、実際にすごい勢いで建設されるビル群・地下鉄と、6年前に中国を訪れたときの変化を目の当たりにすることで一層興味がわいた。

総括すると、私は西安交通大学サマースクールへ参加することによって、更なる文化理解、学習意欲の向上、かけがえのない友人を得ることができた。